

# 水の声

ダムが脅かす  
村びとのいのちと暮らし



特定非営利活動法人  
メコン・ウォッチ

# 水の声

ダムが脅かす村びとのいのちと暮らし

特定非営利活動法人メコン・ウォッチ

執筆 杉田玲奈  
監修 松本悟  
編集・校正 土井利幸  
校正協力 木口由香、東智美  
発行 特定非営利活動法人メコン・ウォッチ  
〒110-0015 東京都台東区東上野 1-20-6 丸幸ビル 2階  
電話 03-3832-5034  
Eメール info@mekongwatch.org  
ホームページ <http://www.mekongwatch.org>  
協力 エミ・トランデム、3SPN  
写真 杉田玲奈  
レイアウト・  
デザイン 杉田玲奈  
印刷・製本 (有) ソーゴグラフィックス  
発行日 2008年9月30日

## 本文の表記について

原語による地名・人名などのカタカナ表記は、一般に広く使われているものを参考にしつつ、参考とする先例が見あたらない場合は、現地で行われている発音をもとに表記を試みた。一部は英語表記から発音を類推してカタカナ表記にしたものもある。日本語で慣例化している団体・企業名に関しては日本語で表記し、その際に、英語名や略称を併記したものもあるが、慣例化していない団体・企業名については原語・英語のままとした。度量衡・現地通貨もほぼすべてカタカナ表記としたが、百分率（パーセント）と電力の単位である「メガワット」は、それぞれ「%」と「MW」を用いた。「ドル」は、特に断りのない限り「米ドル」を指す。

## 02 はじめに



### 04

#### 第1部

セサン・スレポック・セコン

今昔物語 ダムが変えた  
村びとたちの  
暮らし

### 22

#### 第2部

水の声が聞こえますか？

村びとへのインタビュー

### 45

#### 第3部

もっと知るための9章

もっと知りたい!!	もっと知りたい!!	もっと知りたい!!	もっと知りたい!!
カンボジアの地勢	メコンの魚の回遊	三河川のダム開発	カンボジアへの影響 とセサン川の場合
P.45	P.48	P.50	P.59
もっと知りたい!!	もっと知りたい!!	もっと知りたい!!	もっと知りたい!!
カンボジアへの影響 とスレポック川の場合	越境する環境被害を 防ぐための枠組み	環境影響評価は問題回避に 貢献しているのか？	村人の要望、関係者の対応
P.68	P.70	P.72	P.76
			おわりに と日本とのかかわり
			P.85

セサンの村から  
〜ラタナキリ州〜

P.23

スレポックの村から  
〜ラタナキリ州〜

P.29

セサン・スレポックの  
移転対象村から  
〜ストウントレン州〜

P.34

セコンの村から  
〜ストウントレン州〜

P.41

### 88

参考文献

### 91

第4部 資料

年表  
村びとが発した  
主な声明・宣言・要請文

本書は、セサン・スレポック・セコン川とともに暮らす、カンボジア北東部の村びとたちの声を集めたものである。3つの河川は、メコン河の支流であると同時に、ベトナムやラオスに水源を持つ国際河川でもある。1993年11月、セコン川の上流でベトナム政府がヤリ滝ダム建設を開始して以来、三河川流域でのダム開発が加速し、下流のカンボジアに住む人びとの生命と生活が脅かされてきた。カンボジア側の村びとたちは、カンボジア・ベトナム両国政府、メコン河委員会、ダム開発を支える援助国・援助機関にダムの被害を訴え、問題解決を求めつつづけている。しかし、今日に至るまで、ダムのもたらす悪影響を緩和する有効策や、住民が受けた損害に対する補償は実施されていない。一方でダム開発は、ベトナムやラオスばかりか、カンボジア領内でも勢いを増している。その大半は、ベトナムを筆頭とするカンボジア外の国や企業が主導する事業である。事業実施主体、建設資金、事業を大きく左右する意思決定、自然環境や住民生活への悪影響が国境をまたぐことで、問題がいつそう複雑になり、解決がいちじるしく困難になっている。

わたしたちメコン・ウオッチは、本書で村びとたちが語るさまざまな問題について、村びと自身や「セサン・スレポック・セコン保全ネットワーク」(3S Protection Network = 3SPN)をはじめとするカンボジア内外のNGOとも協力しながら、現地での調査研究、日本政府や関連機関への情報提供や政策提言、一般市民への問題提起を行ってきた。本書もそうした活動の一環であり、セサン・スレポック・セコン川流域に住む村びとたちの現状を、より多くの人びとに知っていただくことが目的である。力不足を痛感しつつも、それが村びとたちの直面する問題を解決する一歩であると信じていた。

本書を制作するにあたっては、カンボジア、メコン河流域、ダム開発などの話題にあまりなじみのない方がたにも読んでいただけるよう心がけた。第一部「セサン・スレポック・セコン今昔物語」ダムが変えた村びとたちの暮らし」では、本書が対象とするカンボジア北東部での出来事の概要を物語仕立てで再現した。村の暮らしにあるとき起こったことを読者に追体験していただけるよう、イメージを多用し、文章は簡潔にとどめた。

第二部「水の声が聞こえますか? 村人へのインタビュー」には、セサン・スレポック・セコン川流域の村々に住む人びとからの聞き取りをおさめた。現地を訪ねて、川とともに存在する日々の営みを連綿とくりかえしてきた村びとたちのことばに耳を傾けるたびに、心を突きうごかされる。現代史のうねりに翻弄されながら、伝統・文化・家族をいづくしみつつ自然を恐れうやまいつけ、問題に立ち向かおうとする個々の村びとたちの表情と、しばしば逆説的に軽妙でユーモアにあふれた語り口を再現することで、「かわいそうな被害者たち」といった類型化をさけることができばと思う。

なお、第二部のロング・インタビューはすべて、2008年6月、執筆者自身がカンボジア北東部の現地で、英語の通訳を介して実施した。村びとはクメール語あるいはラオ語で応じたが、日本語にまとめる際には、聞き取り時の雰囲気や村びとの口調が伝わるよう配慮して書きおこした。シヨート・インタビューはすべて、2007年10月から11月にかけて、

現地 NGO である 3SPN の助けをかりた村びとが自分たちで集めた証言をもとにしている。聞き取りは現地語で実施され、クメール語の記録を 3SPN が編集・英訳を行った。その後、ロング・インタビュ同様、証言時の条件・雰囲気 を考慮しつつ英訳から日本語にまとめた。

第3部「もつと知るための9章」では、カンボジアの地勢、メコン河の魚の回遊現象、セサン・スレポック・セコン川流域のダム開発の現状と弊害、問題解決に向けたこれまでの取組みなど、村びとたちが直面する問題を読者により深く、より体系的に理解していただくために必要なテーマを9項目に分けて詳述した。第4部「資料」では、本書で取り上げた出来事を年表として整理するとともに、被害住民らが発した主な声明文や要請書の和訳を時系列に並べた。声明文などの原文はすべてクメール語であるが、本書では、英訳から本文のみ日本語に翻訳した。読みやすくするために意訳をほどこした部分もある。

本書で取り上げた問題を、途上国の開発や経済援助にまつわる負の側面、とりわけ途上国で周縁化されている人びとに襲いかかる環境被害や生活破壊として一般化することはきわめて容易である。実際のところ、経済開発事業の計画・実施における説明責任（アカウンタビリティー）の欠如、情報公開や住民参加の不徹底、環境影響評価（EIA）実施時の影響の軽視や矮小化、女性・先住少数民族・高齢者・子どもといった社会的「弱者」への無関心・無見識、被害住民の貧困化や救済の遅れ、といった問題は、メコン河流域は言うにおよばず、世界の至るところでくりかえし確認されている。しかも、こうした問題は、日本に住むわたしたち一般市民とも決して無縁ではない。日本政府や日本企業から、今この一瞬も途切れることなく、多額の政府開発援助（ODA）、企業支援を目的とした公的資金、基盤整備のための民間投融資が途上国に流れ込み、人びとのいのちと生活を脅かしている。これは、目をそらしてはいけない現実である。

本書の発行は、多くの人びとの協力によって実現した。特に、現地での聞き取り実施や草稿へのご意見などで協力していただいた次の方がたに感謝の意を表したい。ラタナキリ・ストウントレン両州の村びとのみなさん。3SPN の元アドバイザー、エミ・トランデム氏。Culture and Environment Preservation Association (CEPA) の職員、テク・バナラー氏とピアーク・サバン氏、元職員のウン・バナーク氏。3SPN 代表のキム・サンハー氏。元日本国際ボランティアセンター (JVC) カンボジア事務所代表の米倉雪子氏。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェローでメコン・ウオッチの理事でもある新江利彦氏。メコン・ウオッチのボランティアの大格登氏と林亜紀子氏、インターンの大垣俊朗氏。最後に、本書の制作にあたっては、高木仁三郎市民科学基金および Oxfam Australia から助成をいただいた。この場をおかりしてお礼を申し上げます。